

解説



実験計画法から品質工学へ，田口玄一の生涯におけるターニングポイントの数々

From Design of Experiment to ROE, Numerous Turning Points in Dr. Genichi Taguchi's Lifetime

田口 伸*

Sbin Taguchi

矢野 耕也** (聞き手)

Koya Yano

最近の品質工学会では、会員が発足当初に比べて半分くらいが入れ替わったように思われる。そのような状況であるため、実物の田口玄一は見たことがなく、どれだけすごかったかという話も伝説として聞いているか、それすらあまりよくわからない、という人もいるであろう。今回はご子息であるASI社長の田口伸氏を招き、家族から見た田口玄一、若いころからさまざまな恩師を含めた人間関係など、内部の人間でしか知り得ないことについて語ってもらうことにした。なおインタビューは2019年10月2日、学会会議室で行った。

1. 若き日の田口玄一と数々の出会い

矢野 品質工学会が品質工学フォーラムとして始まったのは1993年で、26年も前のことになり、当初は「フォーラム」を名乗った一種の任意団体であったが、いわゆる学会として正式な学術団体となったのは1998年で、2016年の9月に一般社団法人化した。そのように結構長い年月が経過しているが、学会が出来た当初のいわゆる若手会員も定年退職に差し掛かる年代になっているし、また初代会長であった田口玄一先生（以下、田口と記す）も2006年に病に倒れたこともあり、ここ十数年は田口に直接触れる機会さえないことから、若手を含め、田口をよく知らないという人も少なくはないと思われる。そのような状況の中、若い人に田口のさまざまな伝説

やエピソードの一端を分かってもらうため、品質工学の成り立ちや、家族でしか知り得ない部分、その他のさまざまなことを語ってもらい、発想の秘密を発掘したい。

田口伸（以下、伸） 研究会に出ている人は、間違いなく品質工学に関心を持っている。昔の話から始めたほうがいい？

矢野 田口は、若いときから晩年まで、とにかく超絶的なものを含めての伝説が多い。時系列で聞くことになると思うが、まずは、家族から見た田口はどんな人だったか？

伸 片時も休むことなく突き進んだ人だった。海軍の水路部¹⁾でナビゲーション技術を学んだ。飛行機から星の位置を測り、最小二乗法で自分の位置を計算する。最小二乗法に出会って、国会図書館で独学した。戦後、厚生省や統計数理研究所²⁾にいたころ推計学の大家、東京大学の増山元三郎先生³⁾に見いだされた。増山先生も難解な人だったらしい。

矢野 伸さんは増山先生に会ったことはあるか？

伸 子供の頃、会ったことがあると思う。田口は増山先生に見いだされ、戦後の間もない時期の日本企業の工場実験に関わっていく。森永のパニシリン⁴⁾やキャラメルのように、実験計画法をいかに技術の世界で使うかに注力した。田口が育った新潟県十日町市は、縄文時代から着るものを作っていたと聞く。それから織物とか染色とか技術の背景の濃い土地柄だった。田口の実家には織機があって、田口の父は小規模ながら人を使って着物を作っていた。自然の流れで桐生工専（現在の群馬大学）の紡

* American Supplier Institute

** 日本大学